
タイトル	北海道における中小企業家同友会の教育(11)
著者	竹田, 正直; TAKEDA, Masanao
引用	開発論集(105): 37-58
発行日	2020-03-17

北海道における中小企業家同友会の教育(11)

竹 田 正 直*

はじめに

北海道中小企業家同友会（以下、北海道同友会）の創立50周年記念講演会、記念式典、記念祝賀会が、2019（令和元）年11月22日（金）午後2時から7時半まで、札幌パークホテルで行われた。これらの記念行事は、全道10支部からと道外他府県代表もふくめ811名の参加で盛大に開催された。北海道同友会の創立は、中小企業家同友会全国協議会（以下、中同協）が、1969年11月17日に東京商工会議所ホールで結成された5日後で、中同協創立大会と共にオブザーバー参加していた他府県の組織とくらべても実に早い対応であった。

北海道同友会は、創立50周年記念テーマを「つなぐ～原点から未来へ」ときめ、とくに、2019年2月の組織数5,765名を記念日の11月22日までに6,000名とすることを決め、守和彦代表理事、藤井幸一代表理事、曾根一代表理事、山田修三組織・企画委員長を先頭に、役員、会員、事務局がかかってない努力を傾注して50周年記念日に6,052名の会員を達成した。

記念講演会では、藤井幸一北海道同友会代表理事が、「今日がこれからの50年のスタート。中小企業の経営は困難の連続ですが、その困難を乗り越えた“はやぶさ”の実践から学ぼう」と開会挨拶を述べた。それに続き、「やれる理由こそが着想を生む——はやぶさ式思考法」のテーマで、川口淳一郎 JAXA 宇宙航空開発機構シニアフェローが講演を行った。川口淳一郎氏は、「はやぶさ」と「はやぶさ2」の打ち上げにかかわる経緯とともに、著名なスポーツ選手のコーチ法などにもふれて、「独創性にこだわる」、「日本を元気にする」、「全ては心から始める」、「入門者であると気づく」、「自分でかちとったものは本当の実力」、「人材育成は一代目の引き際」、「信じて裁量を任せる人材育成」、「現場に足を運ぶこと」など企業の人材育成への多くの助言を提言した。

記念式典では、守和彦代表理事が式辞を述べた。守和彦代表は、1969（昭和44）年7月に「北海道中小企業家同友会をつくりましょう！」という手書きの文書で、「経営者は孤独です……この悩みを解決したいと心から希って」北海道同友会を創立し、これまでの歩みの特色を①「共学、共育、共生」の企業づくり、②力をあわせて経営環境を改善してきた実践、③会員とともに事務局員も同友会運動の主体者として誇りを持って仕事に取り組んできたこととまとめ、すべての市町村に中小企業振興基本条例と同友会会員をつくり、中小企業の活躍で地域の

*（たけだ まさなお）北海学園大学開発研究所特別研究員、（北海道大学名誉教授）

新たな可能性を開こう、と提起した。^(注1)

その後、鈴木直道北海道知事が、「地域経済と雇用を支える6,000名の中小企業家の団体として、さらなる発展に期待します。」と祝意を述べた。さらに広浜泰久中同協会長が、「全国最大の会勢の北海道同友会は、社員教育活動、『21世紀型中小企業づくり』の提唱、中小企業振興基本条例制定運動をリードしてきた。これからも同友会運動の先頭に」と祝辞を述べ、50年会員企業10社10名をはじめ38社38名が表彰された。祝賀会では、6千名会員達成を牽引してきた支部長10名と山田修三組織・企画委員長らの音頭で乾杯。50年会員の井上一郎氏や、国吉昌晴中同協顧問（元北海道同友会事務局長・中同協専務・副会長）、宇佐美隆中同協総会実行委員長などが夫々回顧と未来へ向けた挨拶をした。2時間近い歓談の後に曾根一代表理事が「6,000名の会員を力に、次の50年を目指し、耐えうる組織に変わっていこう」と述べ三本締めで式典、祝賀会を終えた。

50周年を記念して発刊された創立50周年記念誌編集委員会『北海道中小企業家同友会 50年の軌跡——地域と共に歩み、人が輝く企業づくりをめざして』（2019年11月22日刊、印刷体アイワード、278～279頁、略称、『北海道同友会50年の軌跡』）は、内容豊かで今後の発展への教訓に富む論考や座談会とともに歴史的な資料が豊富に収録されており研究にとっても貴重な記念誌となっている。田中傳右衛門(株)和光代表取締役会長を委員長とする編集委員会の2年に及ぶ編集準備の賜物である。とくに、特集Ⅰ、「よい会社をつくろう」の、『『人を生かす経営』の実践と5委員会活動」と「わが社にとって同友会大学とは」の座談会とパネルディスカッションは、守和彦代表理事が式辞で、第1にあげた「共学、共育、共生」こそが、同友会の企業づくりの核心であることをしめしている。そのことは、拙稿にとっても大きな意義を有している。^(注2)

なお、創立50周年の年の第67期同友会大学は、2019年1月21日入学式、9月13日卒業式を行い、41名が入学し40名が卒業した。その平均点は69.4点で歴代1位。50期、30年ぶりの更新である。創立50周年記念への同友会大学としての多大な貢献といえるが、なんと更新したそれまでの第1位が、今回分析する第17期生である。^(注3)

北海道同友会の共学・共育の多様な活動のなかで同友会大学はその中軸を担っていると言っても過言ではない。この同友会大学の歴史的な分析とともに、筆者が、同友会創立前から提起している「共育」についても検討したい。本号では、同友会大学第17期と第18期の事例分析によって「共育」概念の構造仮説を検証したい。

第1章 北海道中小企業家同友会第17期同友会大学

(1) 第17期同友会大学の日程と講義概要

第17期同友会大学は、1989年1月13日（金）に開校式を、第一ビル（札幌市中央区北4条西16丁目）北海道同友会会議室で行い、30回の講義終了は、4月24日（月）で、卒業式

は5月12日(金)に行われた。毎週2回(月金が主で、時に火木もあった)午後6～9時であった。毎週2回、午後5時に定時退社し同友会大学の講義へ向かうことは、とくに中小企業の職場にとっては大変な努力と周囲の理解が必要であった。

受講生代表の決意表明は、玉井産業(株)玉井繁氏が行った。「今私たちは、社会という大河を渡る小舟のごとき存在です。対岸にある目標にたどりつこうとする時、正しい情報、知識、教養がなければとても渡り切れるものではありません。同友会大学で学ぶことは、大河を渡る確かな保障になるものと確信しております。」^(注4)

単元構成、すなわち、単元Ⅰ、「経済と中小企業」、単元Ⅱ、「北海道論」、単元Ⅲ、「経営と法律」、単元Ⅳ、「経営分析」、単元Ⅴ、「科学技術論」、単元Ⅵ、「人間と教育」、「総括講義」、は第16期と変わらない。

単元Ⅰ、「経済と中小企業」の担当者とテーマは基本的に変わっていない。北大経済学部から森杲教授、佐々木隆生助教授、眞野脩教授、富森虔児教授が、そして札幌学院大学三好宏一教授である。講義の順番は少し変化している。順番とテーマが若干変化したのが、2講目の札幌学院大学三好宏一教授の「現代の情勢をどう理解するか～グループ研究(1)新聞の読み方～」である。サブテーマに「新聞の読み方」が付加されている。新聞を用いての経済を中心とする情勢分析を試みたものである。この分野での提出レポートで『同友会大学第17期生記録集、「新しい峰へ』』に掲載された7本のうち6本が現代の日本やアメリカの経済分析、経済の国際化についてである。順番は、16期の5講目が17期で2講目になっている。

単元Ⅱ、「北海道論」は、北大永井秀夫教授、北大山田定市教授、藤女子大学小笠原克教授、日本民族学会田中丁了会員のテーマも順番も変化していない。

単元Ⅲ、「経営と法律」は全員弁護士の郷路征記氏、伊藤誠一氏、向井清利氏のテーマも順番も16期とかわっていない。向井弁護士は(1)と(2)の2講義担当である。

単元Ⅳ、「経営分析」も全員税理士の芥川満砂子氏、村上昭紀氏、池脇昭二氏の担当もテーマも順番も16期と同じである。池脇氏は2講とも同じである。

単元Ⅴ、「科学技術論」は、若干の変化がある。テーマと担当が変わっていないのは、北大田中一教授、北海道東海大西村弘行教授、北大吉田文和助教授である。西村教授が4講目に、吉田助教授は5講目である。「コンピューターと情報化時代」は、16期の北大青木由直教授から北大の山本強助教授に代わった。「科学と技術—歴史からの発想～グループ研究(3)～」は、「科学技術の発展と人類の課題～グループ研究(3)～」として北大の赤石美紀助教授に代わっている。若干のテーマの変化はあるが、歴史的発想の観点は同様である。

単元Ⅵ、「人間と教育」は、北海道同友会西谷博明事務局長、(株)北海道邦楽邦舞協会平沢秀和事務局長、北大竹田正直教授、北海学園大学後藤啓一教授、(株)共同印刷木野口功社長、札幌学院大学方波見雅夫教授のテーマや担当は変わっていない。後藤教授と木野口社長の講義順が入れ替わっているだけである。

「総括講義」は、従前と同じく北海道同友会大久保尚孝専務理事の担当である。^(注5)

資料 1 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第 17 期）

日 程	講 義 テ ー マ	講 師
開 校 式		
'89 1月13日(金)	◎学長あいさつ, 教育委員の紹介, ガイダンス ◎班編成の発表, 性格・職業興味検査	
単元Ⅰ 経 済 と 中 小 企 業		
1月17日(火)	◎経済学をどう学ぶか ～人間のくらしと経済学～	北海道大学 教授 森 杲氏
1月20日(金)	◎現代の情勢をどう理解するか ～グループ研究(1)新聞の読み方～	札幌学院大学 教授 三好 宏一氏
1月23日(月)	◎現代の世界経済をみる視点	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
1月27日(金)	◎これからの中小企業経営のポイント	北海道大学 教授 眞野 脩氏
1月30日(月)	◎日本経済の課題と展望 ～中小企業の立場からみた日本経済論～	北海道大学 教授 ^(ママ) 富森 虔児氏
単元Ⅱ 北 海 道 論		
2月3日(金)	◎北海道の近代史から何を学ぶか	北海道大学 教授 永井 秀夫氏
2月7日(火)	◎北海道経済の過去・現在・未来 ～中小企業がひらく新しい可能性～	北海道大学 教授 山田 定市氏
2月10日(金)	◎北海道の風土と文学	藤女子大学 教授 小笠原 克氏
2月13日(月)	◎北方少数民族の生き方で考える ～もうひとつの北海道史～	日本民族学会 会員 田中 了氏
単元Ⅲ 経 営 と 法 律		
2月16日(木)	◎日本国憲法の特徴と私たちの課題	弁護士 郷路 征記氏
2月20日(月)	◎「改正労働基準法」と中小企業	弁護士 伊藤 誠一氏
2月24日(金)	◎債権の管理と回収(1)	弁護士 向井 清利氏
2月27日(月)	◎債権の管理と回収(2)	弁護士 向井 清利氏
単元Ⅳ 経 営 分 析		
3月3日(金)	◎経営分析の ABC	税理士 芥川満砂子氏
3月6日(月)	◎経営分析のすすめ方	税理士 上村 昭紀氏

講義時間：18：00～21：00

日 程	講 義 テ ー マ	講 師
3月10日(金)	◎経営分析の事例研究(1)	税理士 池脇 昭二氏
3月13日(月)	◎経営分析の事例研究(2) ～グループ研究(2)～	税理士 池脇 昭二氏
単元V 科 学 技 術 論		
3月16日(木)	◎科学と人間 ～自然科学の発展と人間生活～	札幌学院大学 教授 田中 一氏
3月20日(月)	◎コンピュータと情報化時代	北海道大学 助教授 山本 強氏
3月24日(金)	◎科学技術の発展と人類の課題 ～グループ研究(3)～	北海道大学 助教授 赤石 義紀氏
3月27日(月)	◎バイオテクノロジーと北海道の未来	北海道東海大学 教授 西村 弘行氏
3月31日(金)	◎技術革新と中小企業	北海道大学 助教授 吉田 文和氏
単元VI 人 間 と 教 育		
4月3日(月)	◎幹部に求められる現代のマナー	北海道同友会 事務局長 西谷 博明氏
4月7日(金)	◎人間と話し言葉 ～コミュニケーションをより豊かにするために～	(社)北海道邦楽舞協会事務局長 (元 HBC アナウンスアカデミー所長) 平沢 秀和氏
4月10日(月)	◎教育とは何か ～社会と教育の歴史～	北海道大学 教授 竹田 正直氏
4月13日(木)	◎部下をどう教育するか(1) ～現代人の社会心理と組織の活かし方～	北海学園大学 教授 後藤 啓一氏
4月17日(木)	◎部下をどう教育するか(2) ～目標必達の社風をつくりあげるために～	(株)共同印刷 社長 木野口 功氏
4月21日(金)	◎“知恵”ある人間に育つために	札幌学院大学 教授 方波見雅夫氏
総 括 講 義		
4月24日(月)	◎中小企業の未来と私たちの課題 ～同友会大学で何を学んだか(グループ討論)～	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

※卒論の提出

※卒業式は5月12日(金)PM6：00～9：00

※肩書きは講義当時のものです。

出典：西谷博明編『同友会大学第17期生記録集“新しい峰へ”』、北海道同友会社員教育委員会、1989年7月、10～11頁。

資料 2

決意表明

時代の流れは、ますます速くなり、変化も激しくなっています。そのため、よりスピーディーな対応と多様な能力が私たちに要求されています。

大きな夢とロマンを実現しようとする時、その基礎になるのが企業です。そして企業発展の原動力は、人間でもあります。人間性を尊重し働きがいのある社風を作り上げると共に、私達自身が積極的に学び、自らのレベルアップをはかる事が大切だと思います。

頭の中がからっぽであったり、つまらない知識や誤まった知識しか入っていないければ、問題を発見したり解決する事はできません。“くずを入れてくずを出す”結果になりかねないのです。

今私たちは、社会という大河を渡る小舟のごとき存在です。対岸にある目標にたどりつこうとする時、正しい情報、知識、教養がなければとても渡り切れるものではありません。

同友会大学で学ぶことは、大河を渡る確かな保障になるものと確信しております。4カ月、積極的かつ情熱的に学び、時代の要請に応じ得る人間になりたいと、今、燃えるような決意を固めております。

講師の先生方、父兄の皆さんの御配慮と御指導をお願い申し上げ、入校に当たっての決意とさせていただきます。

1988年1月13日

同友会大学第17期生
代表 玉井産業(株)
玉井 繁

出典：西谷博明編『同友会大学第17期生記録集“新しい峰へ”』、北海道同友会社員教育委員会、1989年7月、7頁。

(2) 第17期同友会大学の学びの背景と受講生・卒業生の特徴

第17期の受講生は、募集定員40名を大きく上回り、59名の受講生で入校式を迎えた。卒業は47名で、卒業率は79.7%で、17期中15位とふるわなかった。しかし、一人だけ、成績は一定レベルを超えて優秀であったが、出席日数が1～2日不足だった受講生がいて、この受講生には次の18期の指定する単元を受講してレポート成績が合格ラインを超えれば17期生として卒業を認めることとした。

皆勤者は、47名中17名で皆勤率は36.2%で17期中16位、ところが、レポートと卒業論文の平均点は、67.8点と過去最高、第1位の成績であった。優等賞1名、努力賞6名が受賞し、成績の良さは見事であった。この成績の平均点第1位は、前述のように、今年、創立50周年の2019年の同友会大学第67期生によって、同友会大学卒業50期、30年ぶりに更新されるまで続いた輝かしい成績であった。

優等賞1名は(株)日本除雪機製作所佐々木康悦係長、努力賞6名は、北斗重工(株)荒木精一部長、大西工業(株)小川司課長、シオン・樹脂工業(株)菅井潔係長、ダイヤ冷暖房工業(株)高泉和男部長、札幌出版(株)中川重孝常務、北海道三桜(株)福澤勝守社長、である。

皆勤賞17名は、(株)北日本カーペンター青木好行主任、タナカ化学(株)阿部勉常務、(有)フード

マートあべ阿部英朝社長，北斗重工(株)荒木精一部長，(株)どうきゅう日下靖敏次長，(株)日本除雪機製作所佐々木康悦係長，(株)川端佐々木幸春主任，ダイヤ冷暖房工業(株)高泉和男部長，(株)うやまビューティサロン高玉春美主任，丸本本間水産(株)高橋昭浩主任，(株)浜野竹内祐司氏，札幌出版(株)中川重孝常務，シオン・樹脂工業(株)北広島工場日当正吾係長，ダイヤ冷暖房工業(株)藤川誠二主任，清水勤業(株)藤島雄次課長，建成興業(株)三上清三課長，シオン・樹脂工業(株)北広島工場森谷修一係長である。(注6)

卒業論文テーマは、「同友会大学で学んだことは何か、そして日本と中小企業の未来のためにどうかすかまとめて下さい」で、全員が提出しているが、そのうち7人の論文が西谷博明編『同友会大学第17期生記録集，“新しい峰へ”』，北海道同友会社員教育委員会，1989年7月発行，に掲載されている。7人中5人が中小企業の人材養成や「共育」について論述している。共育について集中的に述べた単元Ⅵ「人間と教育」が，卒論執筆と時期が重複するので単元Ⅵの個別レポートはないが，そのことが，卒業論文のテーマに反映されたか，あるいは，レポートテーマにないにもかかわらず講義全体のなかで最も学んだことと受講生がとらえ，論文テーマに反映したとも考えられる。

荒木精一氏は『『共に育つ』ことが中小企業の未来を照らす』のテーマで「日本と中小企業の課題は数多くあると思うが，その根本的な解決においては，どこまで共に育つこと，つまり共育が出来るかにかかっていると言っても過言ではない。」

小川司氏は，「広い視野で物事を見ることを学んだ」のテーマで，「人間はもっと広い視野で物事を見ること，良いか悪いかを見極める力をつけること，幹部の三責任の一つである育成責任や幹部としてのマナーなど」を学び，佐藤藤三郎氏の『いつも力を合わせていこう』，『かげでこそそしないで行こう』，『働くことが一番好きになろう』，『なんでも何故？と考えろ』，『いつでももっといい方法はないか探せ』をあげ，「私はこの五つのモットーを心に，共に育ち，共に学びつつ生きていきたいと思います。」と先人に学んだ。(注7)

高山智一氏は論文「共育という観点で『魅力ある企業づくり』を」で，「社員教育と言うと，『会社のために働く人間作り』という……そのようにせまく考えずに，社員教育というよりも，社員共育というような考えを持っていただきたい。」と記した。

竹内裕司氏は論文「中小企業経営における人材教育」で，「同友会大学で学んで視野が広がった事があげられますがそれと同時にやはり，自己管理をきちんと行う事，いつまでも勉強する心を持ち続ける事，そして積極的に物事を，自ら進んで行う事が必要であると痛感させられました。」と述べた。

吉川信夫氏は論文「三つの事を気づかせてくれた同友会大学」で，「一つは，私をその気にさせてくれた。二つ目に，私に知る事を教えてくれた。三つ目に，人間としてどう生きるべきかを，問いかけてくれた。」と強調した。(注8)

卒業式後の祝賀会で，数人の卒業生が感想を述べている。佐々木康悦氏は，「レポート書きでは自分の意志を伝える事の難しさ，語いの乏しさにガク然！人間社会に貢献できる企業づく

りを念頭に置き、企業を通じて社会発展の力となる喜びと努力をいつまでも心の中に留めておきたい。」花崎雅彦氏は、第16期に入学したが、途中で他社への出向が決まり出席日数不足のため卒業出来なかったが、社員教育委員会の配慮で17期の中途入学が認められ17期生として卒業できた。「17期の皆さんは、暖かく仲間として迎え入れてくれ大変感謝している。レポートの提出には苦勞した。テーマの提示から提出まで二週間しかなく、本屋で本を選び、レポートを書くのは至難の技だった。でも私の体内に力が蓄えられた。」阿部英朝氏は、「本当に大変だった。文学、科学技術、経済学、全く自分には関係のない世界だと思っていた。豪雪地帯の新篠津村から吹雪について四カ月間無遅刻、無欠席で頑張った自分に『ごくろうさん』と言ってやりたい。そして店を守ってくれた妻に——『ありがとう』。」紺野修氏は「私は同友会大学で、人間として生きていくための“その一”を学んだ。まだ“その二”を知らない。勉強して味のある人間に育っていきたい。」藤島雄次氏は、受講までの日曜日は車のワックスがけだったが、受講後は「読書三昧の日曜日」になり、「レポートには自分の能力の限界を知った。白髪が少し増えた。新聞も正確に読めるようになった。知識も増えた。勉強する苦しみと喜びを知った。同友会大学よ永遠に！」と、自己の変化を述べた。^(注9)

(3) 第17期同友会大学の卒業生への祝辞と励まし

西村信同友会大学学長(株ニシムラ代表取締役副社長)は、1989年5月12日(金)午後6時から、第1ビル北海道同友会会議室における卒業式で、「第17期の卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。四カ月間学ばれた努力に対して、心より敬意を表します。17期の皆さんは過去最高の平均点を記録されましたが、それは皆さんの誇りであると同時に、私達関係者も共にする大きな喜びでございます。」「今のあふれんばかりの思いを大切に、命ある限り謙虚に学ぶ姿勢、精神を持ち続けていただきたいと思います。」そして、同友会の合言葉「会員は辞書の1ページ」をあげ、卒業生もその1ページであり、その中身を今後も豊かにしてほしいと激励し、卒業生一人ひとりをしっかりと同友会運動に担い手に位置づけました。

講師陣で卒業式に出席した講師の祝辞があり、札幌学院大学田中一教授は、「皆さんは今、到達点にいると同時に、新しい出発点に立っている訳で、その意味でも大変おめでたい事ではないかと思います。……この何カ月かを思い出されれば、絶えず学びつづけることは決して不可能ではないとお感じになったのではないかと思います。」と激励の言葉を贈った。

札幌大学森杲教授は、「今年四月に、私は北大経済学部から札幌大学に移り……いや応なしに北海道経済と中小企業経営に直接向かい合わなければならなくなった事です。……企業の幹部となってから再び新たな気持ちで同友会大学で頑張っている姿を見ていると、今の学生の将来の姿が私の頭の中でダブって見えてくるのです。」と、新しい職場でより深く中小企業に関する研究教育に携わる決意を述べている。北大竹田正直教授は、「同友会大学を卒業された皆さんは今、手にされた卒業証書だけでなく、目に見えない無形のすばらしいものを得たと思います。それは、「知識」、「尊敬」、「友情」の三つではないかと思います。」と述べ、もの見方

資料3

答 辞

私たちは、寒さが身に滲みる冬空の下、同友会大学第17期生として入学いたしました。そして今、4カ月の全教程を終え、私共47名は本日晴れて卒業式を迎え、本当の春を感じております。

入学当初、様々な思いを胸に期待と不安を抱いて席に着いたことが今は懐しい思い出として甦ってまいります。1週間に2度、3時間の講義は想像していた以上に厳しいものでした。仕事が忙しくなると何度も挫折しそうになりましたが、その都度「始めたからには最後まで」と嫌がる足に言い聞かせ体を運んだものです。幾度となく襲い掛ってくる睡魔と戦い、次々と容赦なく出されるレポートの作成にあちこちと文献を求め歩き、辞書を引き、悪戦苦闘する日々の連続でありました。

しかし、今は絵てが心地よい疲れとなり、貴重な体験を得た喜びと成し遂げた満足感にひたっております。

私たちを取り巻く様々な情勢を自分達の生活や行動と関連付けて捕えることにより、社会に生きる人間として深い興味を持つことができ、企業を通じて社会に貢献することの意義の大きさを理解することができました。

又私達は、様々な環境の中で活動をしている様々な企業の中からここ同友会大学に集い、机を並べて学び続けて参りました。その中で「共に学び共に育つ」ことの本当の意味を知ることもできました。

生きている限り学び続けていくことを自覚し、学び得た知識を正しく活かす知恵を身に付けていくことが、地域社会と日本経済を真に担う中小企業で働く私たちに与えられた責任であり、任務であることを教えられました。

今私達は同友会大学を離れ、夫々の職場へ戻りますが、この4カ月に学び得た経験を糧に多くの仲間と交流を深め、切磋琢磨して、企業の発展と人間が人間らしく豊かに育ち合える環境創りに努力していく所存でございます。

最後に卒業生一同に代わり、私たちを同友会大学に送って下さった経営者の皆さん、それを支えてくれた上司や同僚の方々、先程心暖まるご祝辞をいただきましたご臨席の皆様はじめ、情熱的に素晴らしい講義をして下さいました諸先生方、惜しむことなく激励と援助を続けて下さいました同友会事務局の皆様からお礼を申し上げます。今後一層のご指導、ご鞭撻をお願い致しまして答辞とさせていただきます。

1989年5月12日

北海道中小企業家同友会
同友会大学第17期生代表
㈱日本除雪機製作所
佐々木 康 悦

出典：西谷博明編『同友会大学第17期生記録集“新しい峰へ”』、北海道同友会社員教育委員会、1989年7月、62頁。

考え方、関連付け、多面的に見る力としての「知識」や、会社のトップや同僚、家族からの「尊敬」、今後最高の宝となる同友会の仲間との「友情」の重要性を述べ、今後ともこの三つを輝かせるよう希望した。

岡村敏之同窓会大学同窓会会長（ダイヤ冷暖工業㈱社長）は、「17期生は大変優秀な成績で卒業されたと聞きました。本当におめでとうございます。……皆さんはこれから何をなすべき

か、何を身につけてゆくべきかを学んだことでしょう。」今日から同窓会に参加し、三つの申し合わせ、①最低年1回以上の同期会の開催、②年二回の同窓会研修会への参加、③同友会の講演会、研修会への積極的参加、を紹介し、今後の学び合いを訴えました。

北海道同友会西谷博明事務局長は、17期受講生全体の講評を述べた上で祝意と激励を述べた。「充実感に満ちたさわやかなお顔は、まぶしく輝いて見えます。……水仙は厳しい冬の間に自からの球根の中にしっかりとエネルギーを蓄^(ママ)わえ、時がくればどんな凍土をも突き破って芽を出すのです。……自からの力で雪や氷をとかし春を呼ぶアクティブな球根を共に育てようではありませんか。」^(注10)

これらの激励を受けて受講生を代表して答辞をのべたのは、唯一、優等賞だった^(株)日本除雪機製作所佐々木康悦係長である。「私達は、様々な環境の中で活動している様々な企業の中からここ同友会大学に集い……その中で、『共に学び共に育つ』ことの本当の意味を知ることができました。生きている限り学び続けていくことを自覚し、学び得た知識を正しく活かす知恵を身に付けていくことが、地域社会と日本経済を真に担う中小企業で働く私たちに与えられた責任であり、任務であることを教えられました。」しっかりと同友会大学で学んだことの本質をとらえ、かつ、今後への課題を把握している。^(注11)

(4) 5千名会員の実現と北海道同友会第21回定時総会

第17期同友会大学の開校式(1989年1月13日)が行われた直後の1月24日現在で、北海道同友会会員が5,002名になり、念願の5千名会員を達成した。各支部別では、札幌1,939名、小樽466名、南空知118名、帯広486名、釧路235名、根室89名、中標津61名、北見264名、旭川613名、苫小牧200名、西胆振145名、静内48名、函館338名、であった。この年の新春パネルディスカッションは、「今年の日本・北海道と中小企業経営」のテーマで、北海道新聞社竹内俊夫論説主幹、北大経済学部森杲教授、北大教育学部鈴木秀一教授、^(株)光合金製作所井上一郎社長(小樽商工会議所副会頭、北海道同友会理事)、司会、北海道同友会大久保尚孝専務理事で行われた。また、1989年11月22日の創立20周年日に先駆けて2月21日に、625名が参加して日本教育学会会長、東京大学大田堯名誉教授講演会を行った。第17期同友会大学が実施されていた背景には人材養成や共育に関する北海道同友会活動の大きなねりがあった。^(注12)

北海道同友会は、全国一の5,000名会員を達成し、第17期同友会大学卒業式の直前、1989年4月26日に北海道厚生年金会館に全道12支部から300余名が参加して第21回定時総会を開催した。その年11月22日に創立20周年を迎える総会として盛りあがった。三神実行委員長の開会宣言に続いて関口代表理事は、5千社を超える発展の原動力として、「①各支部の会員が地域と連帯し、地域の要求を見定めて活動をしてきた。②企業は人なりで、人材の確保と社員教育に熱心であった。③自主、民主、連帯を運営の原則にし、ボスを作らず、みんなのためになることを基本にしてきた。」と、発展の要因をまとめた。

来賓挨拶では、北海道知事代理として青木商工労働観光部次長が、「道政への提言もいただき、力強く感じている。20歳を迎え、北海道経済の兄貴分としてのご活躍を」と祝辞を述べた。さらに、札幌市助役が、「札幌市の大部分は中小企業。中小企業の活力が現在のまちをつくった。5千社会員で総合的な活動をされている同友会の皆様と一体となってまちづくりを推進していきたい。」と激励した。また、吉野札幌市議会議長も、「どこの同友会も真剣に勉強されており頭が下がる。」と同友会の真価に触れ祝意を述べた。^(注13)

基調報告は、大久保尚孝専務理事が行い、「本当に素晴らしいお顔ばかり。同友会で勉強して、充実した仕事をしていれば、年もとらず、同友会は美貌と健康にも役立つ（笑い）ことがわかりました。」とユーモアたっぷりに同友会の意義を述べてこの1年間の4つの活動を報告した。第1は、第20回中同協総会を全国1,200名の参加で開催したこと。第2は、全道115市町村に同友会を組織し、「地域の活性化なら同友会」という認識が定着しつつあること。第3は、部会、婦人部、青年部、経営者懇談会や、小樽、苫小牧、釧路の「ふたけた会」、札幌の「未知の会」などで、謙虚に、互いに尊重し合って議論することである。第4は、北海道同友会が先鞭をつけた社員教育と共同求人活動が着実に前進し、全国へしみわたってきていることである。「どんなに会が大きくなっても一人ひとりの想いや要望を大事にし、みんなで民主的に運営する。『5千社員、みんなが主役』。そこに同友会の真骨頂があります。」5,200会員の新目標等をきめて総会は終了した。^(注14)

第2章 北海道中小企業家同友会第18期同友会大学

(1) 第18期同友会大学の日程と講義概要

第18期同友会大学は、1989年7月10日（月）の午後6時から中央区の第一ビル内北海道同友会会議室での開校式から、卒業式の11月10日（金）午後6～9時まで続いた。

講義カリキュラムを見ると、単元Ⅰ～Ⅵ、総括講義までの、単元の名称、単元内の講義数（単元Ⅰは5講義、単元Ⅱ～Ⅳは各4講義、単元Ⅴは5講義、単元Ⅵは6講義）も第17期と同様である。各単元内の担当者やテーマ、講義順序などは、夫々若干の変化がある。

単元Ⅰ、「経済と中小企業」は、森杲教授に代わって、第17期で「現代の情勢をどう理解するか」を担当した札幌学院大学三好宏一教授が、「経済学とは何か～経済学の歴史と現代～」のテーマで第1講義を担当している。森教授のテーマからは、若干、視野が広がっている。第2講義は、17期で第3講義だった北大佐々木隆生助教が前回同様のテーマで担当している。北大富森虔児教授に代わって、札幌学院大学富森孜子教授の「戦後日本経済と私たちの暮らし～生活感覚の日本経済論～」が第3講義となっている。第4講義は前回同様、北大眞野脩教授であるが、テーマが「これからの中小企業経営のポイント」から「これからの中小企業の経営戦略」となった。第5講義は、新たに、北大唐渡興宣教授が「現代の情勢をどう理解するか～グループ研究(1)新聞の読み方」を担当している。

資料 4 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第18期）

日 程	講 義 テ ー マ	講 師
開 校 式		
'89 7月10日(月)	◎学長あいさつ、教育委員の紹介、ガイダンス ◎班編成の発表、性格・職業興味検査	
単元Ⅰ 経 済 と 中 小 企 業		
7月14日(金)	◎経済学とは何か ～経済学の歴史と現代～	札幌学院大学 教授 三好 宏一氏
7月17日(月)	◎現代の世界経済をどうみるか	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
7月21日(金)	◎戦後日本経済と私たちの暮らし ～生活感覚の日本経済論～	札幌大学 教授 ^(ママ) 富森 孜子氏
7月24日(月)	◎これからの中小企業の経営戦略	北海道大学 教授 眞野 脩氏
7月28日(金)	◎現代の情勢をどう理解するか ～グループ研究(1) 新聞の読み方～	北海道大学 教授 唐渡 興宣氏
単元Ⅱ 北 海 道 論		
7月31日(月)	◎北海道の近代史から学ぶ	武蔵女子短大 教授 永井 秀夫氏
8月4日(金)	◎北海道経済の新しい可能性 ～北海道の過去・現在・未来～	北海道大学 教授 山田 定市氏
8月7日(月)	◎北方少数民族の生き方で考える ～もうひとつの北海道史～	日本民族学会 会員 田中 了氏
8月11日(金)	◎北海道の風土と文学	藤女子大学 教授 小笠原 克氏
単元Ⅲ 経 営 と 法 律		
8月15日(火)	◎日本国憲法と私たちの課題	弁護士 郷路 征記氏
8月18日(金)	◎「商法改正」と中小企業	弁護士 矢野 修氏
8月21日(月)	◎債権の管理と回収(1)	弁護士 向井 清利氏
8月25日(金)	◎債権の管理と回収(2)	弁護士 向井 清利氏
単元Ⅳ 経 営 分 析		
8月28日(月)	◎経営分析のABC	税理士 芥川満砂子氏
8月29日(火)	◎経営分析のすすめ方	税理士 藤田 時人氏

講義時間：18：00～21：00

日 程	講 義 テ ー マ	講 師
9月6日(木)	◎経営分析の事例研究(1)	税理士 池戸 俊幸氏
9月7日(木)	◎経営分析の事例研究(2) ～グループ研究(2)～	税理士 池戸 俊幸氏
単元Ⅴ 科 学 技 術 論		
9月11日(月)	◎科学と人間 ～自然科学の発展と人間生活～	札幌学院大学 教授 田中 一氏
9月14日(木)	◎科学技術の発展と人類の課題 ～グループ研究(3)～	北海道大学 助教授 赤石 義紀氏
9月18日(月)	◎バイオテクノロジーと北海道の未来	北海道東海大学 教授 西村 弘行氏
9月22日(金)	◎コンピュータと情報化時代	北海道大学 助教授 山本 強氏
9月25日(月)	◎先端技術の功罪	北海道大学 助教授 吉田 文和氏
単元Ⅵ 人 間 と 教 育		
9月29日(金)	◎幹部に求められる現代のマナー	北海道同友会 事務局長 西谷 博明氏
10月2日(月)	◎教育の歴史と本質	北海道大学 教授 竹田 正直氏
10月9日(金)	◎日本の教育と人間の発達 ～現代青年の特徴と成長の可能性～	北海道大学 教授 鈴木 秀一氏
10月6日(月)	◎現代人の社会心理と組織の生かし方	北海学園大学 教授 後藤 啓一氏
10月13日(金)	◎“知恵”ある人間に育つために	北海道大学 非常勤講師 方波見雅夫氏
10月16日(月)	◎社員と共に育ちあう企業づくり ～人間の誇りにかけて生きる～	(株)共同印刷 社長 木野口 功氏
総 括 講 義		
10月20日(金)	◎中小企業の未来と私たちの課題 ～同友会大学で何を学んだか(グループ討論)～	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

※卒論の提出

※卒業式は11月10日(金)18：00～21：00

出典：西谷博明事務局長編集責任『同友会大学第18期生記録集，“無限”』，北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行，1990年1月，10～11頁。肩書きは講義当時のものです。

単元Ⅱ,「北海道論」は、あまり変化はない。北大永井教授の第1講義は同じで、第2講義の北大山田教授は本テーマとサブテーマを入れ替えている。第3講義の日本民族学会田中会員と第4講義の藤女子大学小笠原教授は講義順が入れ替わっただけである。単元Ⅲ,「経営と法律」は、第1講義の郷路弁護士が前回のテーマ「日本国憲法の特徴と私たちの課題」から「の特徴」を削除したのみである。第2講義は前回の伊藤弁護士の「『改正労働基準法』と中小企業」が、18期では、矢野修弁護士「『商法改正』と中小企業」となり、中小企業経営に重要な「商法改正」に対応している。第3,4講は、向井清利弁護士の「債権の管理と回収」(1)(2)は、17期と同じである。単元Ⅳ,「経営分析」は、前回第2講義の村上昭紀税理士が休み、18期で藤田時人税理士が同じテーマ「経営分析のすすめ方」を担当している。あとの芥川満砂子税理士、池戸俊幸税理士の3,4講義担当も同じである。単元Ⅴ,「科学技術論」の北大田中一教授、北大赤石義紀助教授、東海大西村弘行教授、北大山本強助教授、北大吉田文和助教授の担当者は17期と同じである。第2講義の山本助教授が第4講義に入り、赤石、西村両氏が持ち上がったのと、吉田助教授の講義テーマが、17期の「技術革新と中小企業」から、18期には「先端技術の功罪」となったことである。受講生のレポート内容からみると温暖化による環境問題や道内の泊原発1号機の運転開始などが背景にあったかもしれない。単元Ⅵ,「人間と教育」は、第1講義の北海道同友会西谷博明事務局長は17期と同じだが、次の平沢秀和氏が休み、北大竹田正直教授が第2講義に移り、テーマも従前の「教育とは何か～社会と教育の歴史～」から、18期は「教育の歴史と本質」へと従来サブテーマを本テーマにした。休みの平沢氏に代わって北大鈴木秀一教授が再度復帰して第3講義を担当し、テーマは「日本の教育と人間の発達～現代青年の特徴と成長の可能性～」とした。第4講義は、北海学園大の後藤啓一教授で、17期のテーマ「部下をどう教育するか(1)～現代人の社会心理と組織の活かし方～」から、18期は「現代人の社会心理と組織の生かし方」に代わっている。より専門性を打ち出したと言える。第5講義の札幌学院大の方波見雅夫教授は、テーマは同じで、17期の第6講義から移っている。第6講義の(株)共同印刷木野口功社長は、従前の「部下をどう教育するか(2)～目標必達の社風をつくりあげるために～」から、18期は「社員と共に育ちあう企業づくり～人間の誇りにかけて生きる～」と、より同友会大学の創立理念に基づいた。総括講義の大久保尚孝専務の講義はテーマも変わっていない。^(注15)

(2) 第18期同友会大学の受講生・卒業生の特徴

第18期同友会大学の受講生は52名と聴講生1名で開始された。1989年7月10日(月)午後6時からの開校式で受講生を代表して「決意表明」を行ったのは、(株)サクマ佐久間英一次長であった。佐久間氏は「情勢の変化にともない、従来の技術・経験が通用しない時代になってきました。これからは、どのような変化にも対応できる様な幅広い勉強が必要になってきます。その意味では働きながら学びたい人にとって「同友会大学」こそ絶好の場だと自覚しております。……受講を決意した以上、教養・知識の向上と共に、人間的成長をめざし、参加者全

資料 5

決意表明

情勢の変化にともない、従来の技術・経験が通用しない時代になって来ました。これからは、どの様な変化にも対応出来る様な幅広い勉強が必要になってきます。

その意味では働きながら学びたい人にとって「同友会大学」こそ絶好の場だと自覚しております。チャンスがあれば、是非受講したいと思っておりましたが、今回それが実現出来、喜びと不安で一ぱいです。

しかし、受講を決意した以上、教養・知識の向上と共に、人間的成長をめざし、参加者全員力を合わせ、努力する事を決意し、表明いたします。

1989年7月10日

同友会大学第18期生
代表 ㈱サクマ
佐久間 英 一

出典：西谷博明事務局長編集責任『同友会大学第18期生記録集，“無限”』，北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行，1990年1月，7頁。

員力を合わせ、努力することを決意し、表明いたします。」と、激動の時代を見据え、「人間的成長」と目標をしっかりと把握した決意を述べた。^(注16)

卒業生は47名、卒業率90.4%、18期中、第3位、平均点は、63.4点で第7位、皆勤賞47名中、40.4%で、18期中、第16位。18期生には、最優秀賞も、17期生で1名いた優等賞もない。努力賞は、㈱吉田建設設計事務所石井一夫部長、㈱ホテルサンフラワー札幌原幸多専務、シオン電機㈱村野實社長の3名である。

皆勤賞19名は、㈱サンコー阿部勝則主任、㈱北央事務機阿部定吉課長、東亜セキュリティ㈱有元孝課長、㈱サンコー泉厚主任、アイ・ティ・エス㈱上田美朗部長、(有)札幌キーセンター浦田みどりチーフ、㈱三好商会大坂博士主任、大西工業㈱柏谷孝工場長、㈱ファーストコンピューターシステム川向悟司部長、㈱北海道フキ清水敏文氏、ベル食品㈱高橋義則氏、ベル食品㈱高畑秀樹氏、(有)丸富ライスパーラー武井雅彦店長、ベル食品㈱中村剛氏、大輝印刷㈱原田雄三部長、北清企業㈱星高次長、㈱札幌オペレーションサービス堀忠夫常務、タナカ化学㈱松田繁部長、明電興業㈱森田豊課長、である。^(注17)

受講生が提出した単元Ⅰ～Ⅴのレポートと卒業論文が、「学びのあと」として、紙幅の都合で「一部抜すいして」記録集に掲載されている。30年前のレポートであるが今日的課題に照らしても示唆するところが多い。「日本経済がますます『カジノ経済』化への道へと進んでいる一方、国民の暮らしは、低い生活水準、物価高、長時間労働と経済大国日本の実体は、生活小国、文化小国でもある。」(小林和好)、「我々中小企業は情報の量と質とで正しい判断力をつけ回転の早さで実行力を信条として、会社経営に貢献したい」(松田孝司)、「経済学を学ぶこ

とによって、世界経済に及ぼす日本経済の影響度の大きさ、その中で生活している日本人の生活環境の遅れなどがすごくわかってきた。」(吉田繁樹)、「アメリカが今望んでいる事は、世界経済体制を支えるため、必要な国家的負担を日本に肩代わりさせ、自国の荷を減らしアメリカ自身が力をつけることである。」(高野勝憲)。

昨年、2019年5月24日、国会で全会派一致採択した「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」(略称、「アイヌ施策推進法」)が施行された。これによって日本の法律に初めてアイヌが先住民族であることが記され、日本が多民族国家であることが法律上も確認されたことになる。すでに30年前、佐久間英一氏は、「日本には単一民族国家論が根強くあり、それをくつがえす事は大変な事だと思います。しかし日本にも少数民族が存在し、生活しているのは事実です。その人たちに対する同化政策をやめ、少数民族の権利を憲法的に確立しなければならないと思います。また、現実に身近で起きている差別の問題は考えてもみなかった事で、大きなショックを受けました。人間は生活環境・言葉・風土の違いを超え、相手を認め、尊重することが大切です。」実に先見的な見解である。第18期の田中了講師をはじめ単元Ⅱ「北海道論」の講義からの学びが感じられる。坂本貢氏は「明治政府は先住民のアイヌ民族に対して同化政策、和人化をはかり明治5、6年ごろアイヌ人口は約1万6千人、(和人14、5万人)でした。明治5年には、戸籍が作られ、役人によってアイヌと和人に同じ様な苗字が適当につけられました」と、同化政策の原点も論じられていた。

第Ⅲ単元「経営と法律」では、南田敏勝氏、澤内忠彦氏、栗林正明氏、吉富三史氏、米澤正喜氏、吉田隆信氏、八木澤信一氏、竹島正紀氏など10名が日本国憲法の特徴を論じており、現在読んでも新鮮な内容である。^(注18)

1回3時間、勤務後の6～9時の同友会大学を毎週2回、4カ月間、仕事のノウハウではない科学の基礎的内容の多い同友会大学での学びの継続は至難である。自らの強靱な意志と実行力とともに、職場や家族などの支え無くしてはありえない。18期卒業生の卒業式後の祝賀会での感想には、家族とのかかわりや支えが多く語られていた。小林和好氏は、「忘れもしない8月7日のことである。妻が腎臓結石で、出勤の時、突然苦しみ出した。やっとの思いで病院へ連れてゆくと、石が三コもあり、即入院。会社には休みを貰い、大学も休もうと思っていたら、『私はいいから講義を受けて来たら』と言われ出席した事があった。……妻に感謝します。」と述べている。原田雄三氏は、単元Ⅰのレポート作成中に家族から「同友会大学って、どういう大学？」と聞かれ、「紙袋一杯」の参考書を見せて「これがそうだ」と「無造作な態度」をとったが、何回目かのレポート作成中にまた同じ質問を妻から受け、「今度は私は真剣に、講義カリキュラムを出し」説明したという。^(注19)

(3) 第18期同友会大学の卒業生への祝辞と励まし

第18期同友会大学の卒業式は、1989年11月10日(金)午後6時から第一ビル会議室で行われた。まず、同友会大学学長・社員教育委員長西村信(彬)ニシムラ副社長が、「第18期の皆さ

まのご卒業を、心からお祝い申し上げます。おかげ様で同友会大学も新たに47名の皆さまを加えまして、770人の卒業生を送り出すことになりました。……この四カ月間で、皆さまの好奇心は刺激され、貪欲に学び、そして大局観・人生哲学を身に付けた喜びが、今胸の奥から全身に湧き上がっているのではと思います。」さらに西村学長は、「S. エーゼンスタイン」というロシアの映画監督が、「A プラス B は C になる」漢字の仕組みを日本人から学び、2つの違ったシーンの組み合わせで印象を変える「モンタージュ理論」を作ったとし、「まさに、学ぶとは、問いを持ち続ける事だと言われております。今後とも知的好奇心を旺盛にして、素晴らしい人生を実り豊かに歩んで」と激励した。(注20)

続いての北海道同友会を代表して代表理事の1人、関口功一郎代表理事が祝辞を述べた。「学ぶという良い習慣がついたのですから、その灯を点し続けていただきたいことが一つです。二つめは、卒業された47名の方々が仲良く助け合っていくことが大切だと思います。」講

資料6

答 辞

地球規模の歴史の転換期を迎える中で、私達同友会大学の第18期生は、今日ここに卒業式を迎えることが出来ました。ひとえに諸先生方のご指導、並びに勤務先の上司、同僚、従業員の皆様のご支援とご理解の賜物と感謝致します。

マンネリズムになりがちで、ともすれば利益効果のみを追求する生活を送りがちな私達が様々な専門分野の講師の方々から教える機会を与えられた事は、人生の一つの節目ともなる経験でした。

社会人になって以来、久しく学びの場から遠のいていましたが、同友会大学を通して政治や歴史、経済がどれ程、私どもの生活にとって密接な関わりを持っているかを知らされました。

それらの客観的事実や仕組みを学ぶに従って、日頃のマスコミ情報をどのようにとらえるか、その姿勢の変革を迫られたばかりか、家庭や職場における、私達自身のあり方を問いかけられました。

各講師の伝えようとするテーマの内容に共振を覚え、渇きの中に水が音を立てて吸い込まれるような興奮を覚えたことは諸先輩が経験された事でもあり、同窓の諸氏と共に私自身の生き方を変えて行くのが先決であると悟ることが出来ました。

此度、同友会大学で学べた喜びは夜間通学に伴う様々な困難を差し引いても比較にならない大きなものでした。今後この様な企画を更に発展させ、より多くの企業人が聴講する事が同友会の提唱する「人間が人間らしく生き抜く」土壌を創っていくことにつながるのだと確信いたします。

同友会大学のますますの発展を期待し、感謝の言葉と致します。

1989年11月10日

北海道中小企業家同友会
同友会大学第18期生代表
シオン電機㈱
代表取締役 村野 實

出典：西谷博明事務局局長編集責任『同友会大学第18期生記録集，“無限”』、北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行、1990年1月、58頁。

師の中で出席した方波見雅夫北大非常勤講師は、「仕事にも常に新しい工夫をする……『共に食べる』『共に汗を流す』『共に笑う』……を念頭において」過ごしていただきたいと激励した。竹田正直北大教授は、学校教育の中で子ども自ら心をひらいたり行動し始めるのを、教師がじっと待ち自主性を伸ばす実践を例示しながら、「計画どうりにならない時でも、……部下が育ってくるのを幹部である皆さんが待つという姿勢を、同友会大学で学んだ人間を見る視点として身につけていただきたいと思います。」と、共に育つための自主性尊重の視点を提示して激励した。^(注21)

西谷博明事務局長は、講評に続けて、「現代は、何が起こっても不思議ではない時代です。こういう時こそ自主的に、情熱的に、大局的に、本質的に、科学的に物事を見、判断できる力が求められます。そんな力を養う場が同友会大学ではなかったかと思います」と的確な指摘で結んでいる。^(注22)

卒業式の最後に、努力賞の一人である村野實シオン電機(株)社長が答辞を述べた。「社会人になって以来、久しく学びの場から遠のいていましたが、同友会大学を通して政治や歴史、経済がどれ程、私どもの生活にとって密接な関わりを持っているかを知らされました。……各講師の伝えようとするテーマの内容に共振を覚え、渇きの中に水が音を立てて吸い込まれるような興奮を覚え……より多くの企業人が聴講する事が同友会の提唱する『人間が人間らしく生き抜く』土壌を創っていくことにつながるのだと確信致します。」同友会大学卒業の謝意と意義、今後の発達を展望し、豊かな感性をも示す見事な答辞である。^(注23)

おわりに

「はじめに」でとりあげた、『北海道同友会 50 年の軌跡』の特集 I 「よい会社をつくろう」の 2 つの企画は、同友会大学の歴史と未来を考える上で、実に重要な企画である。

第 1 企画、『『人を生かす経営』の実践と 5 委員会活動』は、1) 全道経営指針委員長高原淳氏 (ソーゴー印刷(株)社長, 帯広), 2) 全道共同求人委員長池川和人氏 (㈱テーピーパック社長, 札幌), 3) 全道共育委員長瀬上晃彦氏 (オムニス林産共同組合代表理事, 帯広), 4) 全道障害者問題委員長田中傳右衛門氏 (㈱和光会長, 札幌), 5) 全道経営厚生労働委員長石見秀樹氏 (日の出運輸(株)社長, 室蘭), 司会, 北海道同友会副代表理事渡辺美智留氏 (岩見沢液化ガス(株)社長, 岩見沢) の 6 人による座談会である。**第 2 企画**の「わが社にとって同友会大学とは～共に育つ土壌づくりの原点を考える」は、2019 年 6 月 25 日に行われた「同友会大学同窓会 “共育” パネルディスカッション」である。パネラーは、1) 同友会大学学長・ベル食品(株)会長福山恵太郎氏, 2) (株)サンコー会長山田修三氏, 3) (株)アイワード常務吉田正枝氏, 4) (株)テーピーパック総務部課長上村貴宏氏, 司会は、同友会大学同窓会会長・(有)機工社社長前田昭二氏である。同友会大学卒業生の同窓会や企業、地域での活動を知ることが出来て実に有益である。紙幅の都合で分析は今後の課題とする。^(注24)

ところで筆者は、中同協や北海道同友会創立の5年前、1964年12月25日公刊の雑誌論文で「共育」を提起している。「教育は“共育”であり、教育の主人公は生徒である」と書き、「共育」は集団を教育する際のカナメともいえる概念であるとし、第1に集団の成員相互の訓育作用であり、第2に、教育者と教育を受けるものとの相互の訓育作用である、という2つの内実を有する概念として55年前から、つまり、中同協や北海道同友会の結成以前から提起している。

筆者は、これまで同友会大学の活動と関連付けて分析し、次のような「共育」構造を仮設した。

1つは、「直接的共育活動」と名付ける同友会大学内部での共育活動である。これには、第1に、講師と受講生との間の共育活動で、圧倒的には講師が教える活動であるが、受講生から講師が学ぶ活動もある。第2は、受講生同士の相互共育活動であり、授業中のみならず授業外での相互共育活動もある。第3は、学長、社員教育委員会、代表理事、事務局と講師や受講生相互の共育活動である。2つは、「間接的共育活動」と名付ける同友会大学の外部での共育活動である。これには、第4に、受講生を送り出している企業での共育活動があり、第5は、受講生の家庭での共育活動であり、第6に、卒業後、全員が参加する同窓会や地域での共育活動がある。^(注25)

第17期、18期の卒業生も第1の講師と受講生との間の共育活動については、各記録集の「学びのあと」のレポートや卒業論文を見れば、しっかりと教え学ばれていることが分かる。18期卒業生の村野實氏は、「内容に共振を覚え、渇きの中に水が音を立てて吸い込まれる興奮を覚えた」と学びの喜びを表現した。結果として、第17期卒業生の平均点が、これまでの最高となり、かつ、2019年の第67期に越えられるまで30年間、50期に及ぶ期間、平均点第1位を保っていたことにも表われていた。この点は、18期生の優秀なレポートの中でも確認された。田村匡氏は、夜中もレポートを書いていると、トイレに起きてきた小学生に「お父さん、小説家になるの!!」と言われ、また、出張先の居酒屋で隣りに教師が座り、「『教育』とはと講釈をはじめたので『“共に育つ”ということではないですか』と言ってやったら目を丸くしていた」という。しかし、講師が受講生に学んだことについては、筆者のように授業の中で課題を提起しては討議する場合や「グループ研究」を担当している講義では、必ずありうるが、後に資料として確認しうるものとしては残っていないことは残念である。^(注26)

第2は、受講生同士の相互共育活動は、多彩である。第17、18期同友会大学は、札幌市中央区北4条西16丁目第一ビル北海道同友会事務局の会議室で行われていたが、近くの西15丁目にある喫茶店「15CHOME」は、夕方6時の授業前から受講生が講義の予習・復習を一緒にやる姿が多く、店のママも励まし、「15CHOME」は「第二の教室」だったという。^(注27)

第3については、社員教育委員会の講評としての西谷博明事務局長の指導がある。

第4の企業での共育活動として、従来報告されていたトップへの報告や社内での報告活動の事例紹介の記録は見られなかった。

第5は、受講生の家庭での共育活動であり、17期の小川司氏は、同友会大学に入学してからは毎日が「本とのにらめっこ」で、少し気を抜くと2歳半の長男から「お父さん勉強しないの！」叱咤されたとのことである。吉田将巳氏は、「同友会大学に通うことで息子との会話の場ができ、家庭での会話が増えた」という。川内浩史氏は、日本国憲法の受講と昭和天皇の死亡が重なり、夫婦で夜中まで天皇制を議論していたら、長男がケンカと勘違いして止めに入ってきた。「同友会大学は、我家の問題意識レベルを確実に引き上げてくれた」とのことである。18期の阿部定吉氏は、小3の娘が、大学進学を決めたのは、父の「悪戦苦闘・徹夜のレポート作製」を見て「あの歳になってから大学に行きたくないもの」であった。^(注28)

第6は、同窓会での共育活動である。18期の卒業式で同友会大学同窓会を代表して同窓会ニュース編集長の大沢眞津子氏（榊共同印刷常務）が、「大学を学び通した喜びを、今、皆さまはかみしめていらっしゃるのではないかと思います。企業が卒業生に求めているものは何かと申しますと、自分自身の生きてゆく過程の中でより積極的に問題解決に当たるという事と、その力を引き出してほしいという事でございます。それは企業への貢献であることもございますが、最終的には、人間らしい、人間の集団の核になってほしいという願いです。同友会大学を卒業された皆さんは、真に人間として信頼される、期待に応えられる人物に成長していただきたいと思ひます」^(注29)と述べ、卒業生が今後企業への貢献のみならず、信頼される人間らしい人間集団の核としての成長をとという同友会大学創立の真髓にふれる素晴らしい激励であった。

第17、18期の事例を分析して、第1の講師・受講生の共育活動では、17期の歴代1位の平均点、優等賞1名、努力賞6名、18期の経済論や民族論レポートの先見性にみられる学びの進化がみられた。第2の受講生同士の相互共育活動は、17、18期でも見られたが、これまでのように多彩とは言えない。第3の社員教育委員会等と受講生、第4の企業での共育活動は、これまで以上の事例は、記録上は見られない。第5の家庭での共育活動は、様々な事例によって一層豊かになった。第6は、同窓会での共育活動であるが、受講生の主体的な活動は見られず、課題を残すものとなった。

注

(注1) 中小企業家同友会全国協議会（略称、中同協）『中小企業家しんぶん』、第1492号、2019年12月5日、1頁。北海道中小企業家同友会（略称、北海道同友会）『中小企業家しんぶん北海道版』、第339号、2019年12月25日、1～3頁。創立50周年記念の講演会、式典、祝賀会には、同友会大学と経営者大学の講師も招待されたので、筆者も全てに参加した。『中小企業家しんぶん北海道版』、第339号の2頁には、筆者の感想が「同友会大学の設立の時から手伝いをしてきた。私は1964年から『共育』を提唱し、全国の同友会にその考えが広がって感無量だ。6,000名会員になってうれしい（北海道大学名誉教授竹田正直）」と記載されている。

(注2) 北海道中小企業家同友会創立50周年記念誌編集委員会『北海道中小企業家同友会 50年の軌跡—地域と共に歩み、人が輝く企業づくりをめざして』（略称、『北海道同友会50年の軌跡』）、

2019年11月22日刊, 印刷(株)アイワード, 278~279頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(10)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第104号, 2019年9月, 17~37頁。

- (注3) 佐藤紀雄責任編集『さらなる高みへ』, 第67期同友会大学記録集, 一般社団法人北海道中小企業家同友会共有委員会発行, 2019年12月, 7頁。
- (注4) 玉井繁「決意表明」, 西谷博明事務局長編集責任『同友会大学第17期生記録集, “新しい峰へ”』, 北海道同友会社員教育委員会発行, 1989年7月, 7頁。
- (注5) 「同友会大学」講義カリキュラム(第17期), 西谷博明編『同友会大学第17期生記録集 “新しい峰へ”』, 北海道同友会社員教育委員会, 1989年7月, 10~11頁。
- (注6) 西谷博明「講評, 自らの中にどんな凍土をも突き破る球根を育てよう」, 「卒業式で特別表彰された皆さん」, 同上, 2~3頁。
- (注7) 荒木精一「『共に育つ』ことが中小企業の未来を照らす」, 小川司「広い視野で物事を見ることを学んだ」, 同上, 54~56頁
- (注8) 高山智一「共育という観点で『魅力ある企業作り』を」, 竹内裕司「中小企業経営における人材教育」, 吉川信夫「三つの事を気づかせてくれた同友会大学」, 同上, 58~60頁)
- (注9) 佐々木康悦「社会に貢献できる企業づくり」, 花崎雅彦「一年越しの卒業」, 阿部英朝「三十年ぶりに書いた作文」, 紺野修「人間“その一”」, 藤島雄次「同友会大学よ, 永遠に!」, 同上, 14, 32, 45, 46, 53頁。
- (注10) 西村信「命ある限り謙虚に学び続けよう」, 田中一「到達点は出発点」, 森杲「北海道の人材は同友会から」, 竹田正直「三つの無形の財産を輝かせて」, 岡村敏之「同窓会活動での学びの継続を」, 西谷博明前掲, 同上, 1~9頁。
- (注11) 佐々木康悦「社会に貢献できる企業づくり」, 『答辞』, 同上, 62頁。
- (注12) 『北海道同友会ニュース』, No.203, 1989年1月31日, 1~7頁。『北海道同友会50年の軌跡』, 前掲, 18頁。
- (注13) 『中小企業家しんぶん・北海道版』, 第1号, 北海道同友会発行, 1989年6月25日, 1面。従来の『同友会ニュース』に代えて, タブロイド版4頁で発刊され始めた。なお, 青木次長はその後知事室長に, 桂助役は札幌市長となった。
- (注14) 同上, 1~2面。
- (注15) 西谷博明事務局長編集責任『同友会大学第18期生記録集, “無限”』, 北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行, 1990年1月, 10~11頁。
- (注16) 佐久間英一「決意表明」, 同上, 7頁。
- (注17) 西谷博明「講評 人間である限り学び続けよう」, 「卒業式で特別表彰された皆さん」, 同上, 2~3頁。
- (注18) 小林和好北海道紙工業材料(株)係長「現代アメリカの経済情勢」, 松田孝司北海道三桜(株)常務「経済学と経営学を経営に生かす」, 吉田繁樹(株)サンコー主任「経済を学ぶ大切さを知った」, 高野勝憲ベル食品(株)「世界における日本の進路」, 佐久間英一(株)サクマ次長「少数民族問題と私たちの視点」, 坂本貢ベル食品(株)「北海道の歴史を知る」, 同上, 13~23頁。
- (注19) 小林和宏北海道紙工業材料(株)係長「忘れられない日」, 同上, 30頁。原田雄三大輝印刷(株)部長「数カ月後」, 同上, 23頁。
- (注20) 西村信「知的好奇心を人生の糧に」, 同上, 1頁。
- (注21) 関口功四郎「学びの灯を点し続けて」, 方波見雅夫「日々是再発見と三つの喜び」, 竹田正直「待つという事」, 同上, 8~9頁。
- (注22) 西谷博明「講評 人間である限り学び続けよう」, 同上, 2頁。

- (注 23) 村野實「答辞」, 1989年11月10日, 同上, 58頁。
- (注 24) 前掲, 『北海道同友会50年の軌跡』, 2019年11月22日刊, 124~148頁。
- (注 25) 竹田正直「集団主義教育の立場と今日的観点」, 『ソビエト教育科学』第23号, 1964年12月25日刊, 128~133頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(10)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第104号, 2019年9月, 17~37頁。
- (注 26) 田村匡(ハマシステム(株)室長)「小説家になるの!!」, 前掲, 『同友会大学第18期生記録集, “無限”』, 25頁。
- (注 27) 福澤勝守(北海道三機(株)社長)「15CHOME」, 『同友会大学第17期生記録集“新しい峰へ”』, 前掲, 29頁。
- (注 28) 小川司(大西工業(株))「二歳半の叱咤激励」, 同上, 16頁。吉田将巳(タナカ化学(株))「親の権威を高めた」, 27頁。川内浩史(株エールプロセス)「夫婦ゲンカじゃない」, 49頁。阿部定吉(株北央事務機課長), 56頁。
- (注 29) 大沢眞津子「人間らしい人間集団の核に」, 前掲, 『第18期生記録集』, 9頁。